



2013年7月10日放送

漢方頻用処方解説 清上防風湯

東邦大学医療センター大森病院 東洋医学科 **河野 吉成**

1. 主な効能

まず初めに、清上防風湯の主な効能についてです。清上防風湯の主な働きは、顔面や頭頸部の炎症を取り除くということにあります。この働きを持つことから、清上防風湯は、主に顔面や頭頸部を中心とした部位に見られる炎症の強い痤瘡に頻用されます。また、処方の応用として、顔面に於ける炎症性の発疹や湿疹、あるいは酒皰や酒皰様皮膚炎に用いられるほか、熱証を呈する花粉症にも使われることがあります。

2. 出典

次に、清上防風湯の出典についてお話しいたします。清上防風湯は、明の時代に龔廷賢（およそ 1539-1632）によって編纂された医書である『万病回春』という医学書を出典とします。本書は、当時の金元医学の理論を色濃く反映した内容でまとめられ、当時の日本の医学にも大きな影響を与えました。

清上防風湯は『万病回春』の中の「面病」という項において、「面に瘡を生ずるは、上焦の火なり。」と記載されています。また、「上焦の火を清し、頭面に瘡癩を生ずること、風熱の毒を治す。」と述べ、清上防風湯の効能・働きを説明しています。

つまり、「顔面に瘡を生じるのは、上焦の火である」と病態を提示した上で、その治療法として、「上焦の火を冷ますことで、頭部・顔面に瘡や癩が生じたものや風熱の毒を治す」のだと解説しているのです。

3. 方剤名の由来

ここですすでお分かりのように、清上防風湯の処方名の由来は、「上焦の火を清す」、すなわち、顔面や頭頸部の熱を冷ます、という意味から来ています。

4. 生薬の構成

次に、本剤の生薬構成について解説いたします。清上防風湯は、防風、荊芥、薄荷、連翹、山梔子、黄連、黄芩、桔梗、枳殻（または枳実）、白芷、川芎、甘草の12味から構成されています。これらのうち、防風と荊芥、薄荷は祛風に働き、連翹、山梔子、黄連、黄芩は清熱に働きます。また、桔梗、枳殻（または枳実）、白芷、川芎は主に排膿消腫に働きます。さらに、白芷と川芎は諸々の生薬が上焦において効果を発揮するよう、引経薬としての役目も担っています。

5. 古医書における記載

清上防風湯が古医書において、どのように解釈されているのかを見てみましょう。浅田宗伯の『勿誤薬室方函口訣』には次のように述べられています。

「此の方は風熱上焦のみに熾んに、頭面に瘡癩毒腫等の症あれども、唯だ上焦計のことにて、中下二焦の分、さまで壅滞することなければ、下へ向けてすかす理はなき故、上焦を清解発散する手段にて、防風通聖散の如き硝黄、滑石の類は用ひぬなり。凡べて上部の瘡腫に下剤を用ゆることは用捨すべし。」

この記述から分かることは、清上防風湯の適用される病態は上焦に局限した風熱であって、中焦や下焦には熱の壅滞は無いということです。したがって、治療としては上焦の熱を冷まして上から外へ発散させる手段を取ることになります。これに対し、防風通聖散は上焦のみならず、中焦と下焦すべてに熱毒が存在する病態に対応する処方ですから、硝黄や滑石などを用いて上から下へ向けて熱を外へ追い出すという手段が取られます。浅田宗伯はこの違いについて、「上部の瘡腫に下剤を用ゆることは用捨すべし」と用法上の注意を促しているのです。

6. 一般的な使い方と応用

次に、本剤の使い方について説明いたします。冒頭でもお話ししました通り、一般には、顔面や頭部を中心とした部位の炎症傾向の目立つ痤瘡に用いられる方剤です。また、その応用としまして、顔面や頭部の湿疹や酒皰、あるいは酒皰様皮膚炎などにも処方されることがしばしばあります。この他、熱証を呈する花粉症にも有効であることが知られていません。

7. 最近の論文・学会発表から

近年の論文や学会発表を見てみますと、例えば、顔面の熱感を伴う多汗症に対して清上

防風湯が有効であったという報告があります。また、脂漏性皮膚炎に対して、清上防風湯と黄連解毒湯の併用が奏効したとの報告も見られました。

8. 方剤運用のポイント

さて、処方運用のポイントについて整理をしてみたいと思います。まず一つ目は、本剤は上焦、特に顔面・頭部を中心に熱毒の証が目立つものに用いる、という点が挙げられます。二つ目は、皮膚症状に用いる場合、特に痤瘡においては、個々の皮疹が発赤し圧痛や膿疱を伴うなどの炎症兆候が盛んなものが適応となる、という点が大切です。そして、三つ目ですが、花粉症に用いる場合には、口渇や顔面の熱感、黄色の鼻汁、眼球結膜の発赤などを伴うものに選択される、ということがポイントとなります。

矢数道明は著書の中で、「上焦の実熱というのが目標で、上部（顔面や頭部）に血熱が鬱滞し、瘡を發し、顔面赤く、上衝を訴える場合に用いる。上部に集まった熱の邪は、上部で發表し清解する方がよい。体質もそれほど虚弱でない場合で、面瘡などは赤紫色になっているものが多い。」と述べています。この記述で示されているように、本剤を理解するキーワードは「上焦の実熱」、それから「上部に血熱が鬱滞」、そして「上部で發表し清解する」、の3点が挙げられます。

9. 処方の鑑別

類方の鑑別についてです。本剤と鑑別すべき方剤として3つ、荊芥連翹湯、防風通聖散、十味敗毒湯を提示いたします。

まず、荊芥連翹湯についてです。荊芥連翹湯は温清飲を基本とした構成ですので、上中下焦に亘る血熱を対象としているという点で、清上防風湯と異なります。また、荊芥連翹湯は一貫堂医学における解毒体質を有する者にしばしば用いられる方剤として知られております。

次に、防風通聖散との鑑別です。防風通聖散は清熱瀉下と發汗達表の働きにより、三焦を通利して表裏の実熱を除くことを目的としている方剤です。つまり、防風通聖散は表裏三焦に熱毒の内蘊を認めるケースに用いられる方剤であり、よって瀉下の働きを持ちます。浅田宗伯が「上焦を清解發散する手段にて、防風通聖散の如き硝黄、滑石の類は用ひぬなり。」と言っているのは、この鑑別点を表しています。

3つ目の十味敗毒湯との鑑別です。十味敗毒湯は本来、風寒湿邪の停滯を前提に少しく熱を帯びた病態に適応される方剤です。したがって、清上防風湯のような血分の熱を取り去る強い清熱作用は無く、風寒の邪を發散し、解表することで湿邪を除くことを目的としている点で異なります。

10. 自験例

最後に、自験例を2例提示いたします。

1 つ目はニキビの症例です。患者は 16 歳の男性で、中学校に入学した頃より顔面に痤瘡が出現。徐々に拡大し、顔面の他、前胸部と上背部にも現れるようになりました。皮膚科で抗生剤の外用と内服を中心に加療を受けましたが、軽快と増悪を繰り返していました。初診時、前額と頬部、下顎に膿疱を伴う紅色丘疹を多数認め、前胸部と上背部にも同様の皮疹が散見されました。

そこで、この患者に清上防風湯エキス (TJ-58) を 7.5g/day 分 3 で処方し、前医処方の外用薬 (ナジフロキサシン) は継続させました。途中経過で便秘の訴えもあったため、本剤に大黄末 1.5g を加味して処方を継続し、内服開始からおよそ 3 ヶ月で皮疹の新生が殆ど見られなくなり、5 ヶ月経つ頃には皮疹は概ね消失しました。

2 つ目の症例です。花粉症を主訴に受診した 42 歳の男性患者でした。ある年の 2 月末頃より鼻汁やくしゃみ、目の痒みが出現し、3 月末までには症状が一時軽快したとのことですが、4 月中旬より再び悪化しました。今年は昨年よりも増して顔面の火照りと皮膚の痒みも強いとのことで、黄色い鼻汁も見られていました。そして、多量の鼻汁を伴うと頭痛が出現し、目が乾燥してショボショボするということでした。

この患者に対し、清上防風湯エキス (TJ-58) と釣藤散エキス (TJ-47) を各 7.5g /day 分 3 で処方し、随時、症状に合わせて点眼薬も処方いたしました。内服を開始してから 2 週間で症状の軽快を認め、鼻汁の量と頭痛の頻度が減少しました。さらに 2 週間処方を継続しましたところ、頭痛と顔面の火照り、皮膚の痒みも概ね消失しました。